

前立腺がん腫瘍マーカー、PSA をご存知ですか？

泌尿器科が診察する悪性疾患の中で、前立腺がんの患者さんは年々増加しています。2016年のがん統計における前立腺がん患者さんの数は、男性の中で胃がんに次いで第2位（男性がん全体の15.8%）、男性のみの疾患にもかかわらず男女合わせても第5位となっています。

増加してきた背景には優秀な腫瘍マーカーの存在があります。それがPSA（前立腺特異抗原）です。腫瘍マーカーとはそれぞれ特定のがんにおいて産生される特異的な物質で、基本的に採血検査で測定します。PSAは前立腺に特異的なたんぱく質の一種で、前立腺がんになると高くなります。ほかのがんの腫瘍マーカーと比較してとても精度が高いため、検診などのスクリーニング検査、つまりがんの可能性のある人を見つけるための検査に大変有効です。

PSAの基準値は一般的に4.0ng/ml以下とされています。ただこの基準値より高ければ必ずがんがあるという訳ではありません。前立腺がんの確定診断をするためには前立腺組織を採取する針生検が必要になります。つまりPSAは針生検の必要性を探るための検査と言えます。

PSAは前立腺体積に比例して高くなる傾向にあります。多くの男性は年齢と共に前立腺が肥大するため、年齢によってPSAの基準値は変わってきます。つまり年齢が高くなるに従ってPSAの基準値は上がっていきます。群馬県の前立腺がん検診では下記の基準値が用いられています（右図参照）。

年齢別PSA基準値

50～64歳	3.0ng/ml以上
65～69歳	3.5ng/ml以上
70歳以上	4.0ng/ml以上

前立腺がんはほとんど症状が出ません。皆さんの中には頻尿、排尿困難、残尿感等の症状を想像されている方が多いかと思いますが、そのほとんどは前立腺肥大による症状です。前立腺がんが相応に進行し、ほかの臓器に転移して初めて症状が出ることが多いのが実情です。例えばリンパ節に転移して足が浮腫んだり、骨に転移して痛みが出るなどの症状です。そうなってから治療すると、なかなか病気の勢いをコントロールすることが難しくなってしまうため、早期に前立腺がんを発見することが必要です。

その為にはPSAのスクリーニング検査がとても重要です。市の前立腺がん検診などを積極的に受診して頂き、異常を指摘されたら泌尿器科専門医の診察をお勧めします。先程も述べましたようにPSAが基準値より高ければ必ずがんがあるという訳ではありません。また必ず針生検が必要という訳でもありません。基準値より多少高くても定期的に採血で経過をみていく方法もあります。

前立腺がんは比較的進行が緩やかと言われており、早期に発見出来れば決して怖い病気ではありません。がんと診断されても手術等の治療を施さず、PSAを定期採血しながら病勢を確認していく“PSA監視”という方法も行われています。是非PSAという検査を理解して頂き、活用していきましょう。

【泌尿器科診療部長 上井 崇智】

